



れば他国人型のがんにかかりやすくなる。ここでは民族集団としての遺伝子の特性は希釈されている。

しかし、問題は個人レベルの遺伝学的感受性であり、分子疫学的研究の醍醐味はそこにある。日本人の食生活は戦後激変したが、最も大きな変動は昭和 30~50 年頃の経済的変動期にあり、その影響が最近の日本人のがん罹患動向に現れ始めている。その頃に育った集団が 50 歳以上のがん年齢に達すると、欧米型のがんの流行に拍車がかかる可能性がある。そこでは、食生活変動に対する生体反応の個々人の特性が問われるようになり、日本で分子疫学を進めていく好期が到来する。さて、若きも古きも疫学研究者は基礎研究者と共同戦線を組み、分子疫学的研究に挑戦してみようではないか。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆  
**Public Health Epidemiology :**  
**公衆衛生政策のための疫学研究**

横浜市立大学医学部公衆衛生

水嶋春朔

**1. 「している仕事」と「できる仕事」と「すべき仕事」**

昨今、関心を集めている Evidence-based Medicine は、客観的根拠を科学的に評価する（臨床）疫学研究の臨床医学への浸透、応用として捉えることができると思います。ある意思決定や判断をするにあたって、その決定や判断に関与する人間の上司（上位機関）の意向、先例、その分野の特定の権威の意見によって決定や判断を行う“Opinion-based Decision Making”に対して、より科学的な客観的根拠に基づいた決定や判断を行う“Evidence-based Decision Making”の考え方の重要性が、薬害問題の反省も関係して、認識されてきています。さらに、保健サービスの提供や健康政策上の決定、判断にも応用され、“Evidence-based Health Care”や“Evidence-based Public Health”として発展してきています（1、2）。

こうした考え方と近い理念として故 Geoffrey Rose ロンドン大学教授は、疫学研究による客観的データに基づいた公衆衛生政策の発展が重要であるとして、公衆衛生政策と疫学研究との架け橋となる「Public

Health Epidemiology（公衆衛生政策のための疫学研究）」の推進を主張しています（3）。

このような流れが、なぜ日本で自主的に発生してこなかったかについての議論は十分なされていないようです。「黒船効果」による「欧米では、、、」の紹介の連鎖、後追い一流の後進国から脱却するためにも、20世紀の日本の疫学研究者の仕事を客観的に総括する意味においても、疫学研究（者）が本来どのような役割を担い、仕事をすべきなのか、活発に論議される必要があると思います。疫学研究者の「している仕事」が、能力や立場やネタからみて「できる仕事だからしている」のか、社会や公衆衛生への貢献度からみて「すべき仕事だからしている」のかといった視点での評価も必要でしょう。「健康日本21計画」関係の研究班に関わらせていただき、日本産の役立つ根拠となる疫学研究（者）をもっと増やしていく必要性を実感しています。

**2. 公衆衛生政策のための疫学研究**

名古屋での第9回日本疫学会学術総会の2日目（1/22）の夜に『第4回疫学の未来を語る若手の集い』が開催され、セッション B「Evidence-based Public Health のための疫学研究」を担当させていただきました。健康政策に客観的な判断根拠（evidence）を与える疫学研究の在り方や、政策の評価に関する疫学研究の方法論などについて、建設的な議論を深めることを目的としたもので、西 信雄先生（宝塚市立健康センター）：「Evidence-based Public Health の考え方」、坂巻弘之先生（国際医療福祉大総合研・総合政策）：「ポピュレーションストラテジーの医療経済効果」、石川秀樹先生（大阪成人病センター研究所）：「生物学的指標とハイリスクストラテジー」の3論者の発表を中心に大いに盛り上がりました。

ロンドン大学（LSHTM）留学中に仲良くなった疫学の上級講師が、疫学・公衆衛生学研究のステップとして、1）記述疫学、2）分析疫学、3）ヘルスサービス研究、4）ヘルスポリシー研究、があると明快に説明してくれて、視界が急に開けた気がしました。すなわち、Evidence-based Public Health の基盤に疫学研究があり、適切な evidence の提供、解釈という疫学研究者の仕事は、とりも直さず適切なヘルスサービス





Cochrane Collaboration, Cochrane Library で有名な A. Cochrane の名著 “Effectiveness and Efficiency Random Reflections on Health Services” が、結核研究所長の森 亨先生によって翻訳され、今年2月末にサイエンティスト社から出版された（定価本体 3,000 円）。原著は、1971 年に出版され多くの人に大きな影響を与えたが、1988 年コクランが亡くなられたあと、1989 年に記念版として復刻された。

コクランは、第3章の「あれだけたくさんものを入れて、出てくるものがまたあれだけ少なくなってしまおう」とする NHS と火葬場との衝撃的な対比をはじめ、まことに辛辣で痛快な表現を随所にちりばめながら、具体例を挙げて NHS の質的改良を目指した。第5章の「有効性と効率」では、作為の罪と不作為の罪について述べた上で、「非効率の最重要の型はとりもなおさず、有効性のない治療法の使用と有効性のある治療法の不正な使用の組合わせである」と断じている。これは治療だけでなく予防にもあてはまる。1971 年初版であるので少し古い本ではあるが、コクランが批判した 1970 年前後の NHS の状況はまさにわが国の現在に当てはまるどころが多く、コクランの指摘には頷かざるをえない。コクランの批判を受けて、その後 NHS では Cochrane Collaboration を発足させた。Cochrane Library の CD-ROM をご覧になった先生方も既に多いと思うが、このような作業のもととなったのがこの本である。

わが国でも最近臨床疫学や Evidence-based Medicine が「はやり」となっているが、がん検診の有効性をめぐる昨今のやや消耗な議論を振り返ると、臨床の分野だけでなくがん予防を含む保健予防サービスの分野においてこそ、証拠をつくるための RCT を推進し、その証拠に基づき政策展開をして行くことが急務であると考えられる。

森先生は 1976 年に既に翻訳を思い立たれ仮訳をされながら、諸般の事情で出版が今日まで延引したとのことであるが、この本を現時点で出版する意義は決して減じていない。小生は翻訳を手にして一日で読み上げ昔の興奮を思い出した。日頃何かとお疲れの会員の先生方には、元気の湧いてくる本としてぜひ一読をお勧めしたい。仮訳から粘り強く出版にまでこぎつけら

れた森 亨先生はじめ関係の皆様にご感謝する。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 「生活習慣と主要部位のがん」

出版のお知らせ

日本がん疫学研究会がん予防指針検討委員会

福田勝洋、大島 明、田島和雄、  
富永祐民、久道 茂、箕輪眞澄

平成 8 年 8 月以来、当委員会は日本がん疫学研究会会員の皆様のご協力のもとで作業してきましたが、そのまとめを「生活習慣と主要部位のがん」と題してこのほど出版できましたのでお知らせします。

生活習慣として喫煙、飲酒、食習慣など 11 項目、主要部位として胃、大腸、肺など 11 部位について、日本人を対象とした分析疫学的論文を収集・吟味し、各要因が日本人のがんのリスク要因、または予防要因として、因果関係がどの程度確かなのかを判定してまとめたものです。副題が示すように、平成 9 年 9 月に発表された、世界がん研究基金/米国がん研究協会編「食物・栄養とがん予防」の、日本人への適用性も併せて検討してあります。また、その過程でまとめた、「防煙、禁煙、分煙のすすめ」—がん予防のための日本がん疫学研究会提言、1998—も付録として巻末に載せました。

この作業を終わって感ずることは、日本人についての疫学的研究で不足している部分が多々残っているということで、皆様にも共感していただけたと思います。今後も日本がん疫学研究会としての努力が期待されまじ、本書をそのささやかな一助にいただければ幸いです。

会員の皆様のご協力を感謝します。

本書の入手方法：

812-0053 福岡市東区箱崎 7-1-146

九州大学出版会

Fax 092-641-0172

電話 092-641-0515

E-mail: kup@mocha.ocn.ne.jp

本体価格 1,905 円（税込み価格 2,000 円）、



送料 310 円(10 冊以上の場合無料)、

支払は現物到着後、振替えにて送金

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

書評：マイロス・ジェニセック著

青木國雄ら訳「疫学、現代医学の論理」

東北大学医学部公衆衛生学教授

久道 茂

最近、疫学やEBMに関する本が内外から多く出版されている。今回、M. Jenicek著の "Epidemiology: The logic of modern medicine"が青木國雄先生らによって訳され「疫学、現代医学の論理」と題して出版された。私は、この本を二日で読み上げたが、実に素晴らしい本である。ただの「疫学」の本ではない。副題にもあるように、現代医学の基本的知識とでも言うべき医学の考え方、医療の思考課程と判断の論理を実に明快に示している。第1章の結論で著者自身が述べているように、疫学は、その名称が将来変わるかも知れない程に、今日的意義は、まさしく「医療の科学」であり、いや、むしろ私は「医学の基礎科学」といっても過言ではない位置付けになっていると考えている。

本著は、疫学の基本的なことから、医学・医療に携わる立場の人間が学ぶべき最も大切な考え方をいろいろな面から解説している。普通の疫学教科書には飽きるほどでてくる病因論とその方法論だけでなく、むしろ臨床の実際に即した診断、治療、予後の評価、集団と個人への対応、各々の統計処理に関する具体的な方法、そして、圧巻は、近年盛んに用いられているメタアナリシスの方法を具体的な例で紹介し、最後に、不確実性を宿命とする医療における意志決定分析についてかなり高度な解説を分かり易くしている。

このような著書は、私は久しく目に触れたことはない。読み終えてかなりの感動を覚えた。13年ほど前に、Fletcherらの "Clinical Epidemiology"に同じような感動を覚えて、仲間と一緒に訳本を出版したことがあるが、その時以来である。

この本を、医師になる人も、すでに医師になっている人も絶対に読むべし、大学の教授は、この本の基本部分を学生に教授すべし、臨床研修指導医はまず自ら学んで研修医を指導すべし、さもなくば新しい卒業生

に軽蔑されること必定、と、考えている。豊富な文献もあるので大学院でのより高度な教育にも利用できよう。

訳本というのは実に骨がおれるものである。原文に忠ならんとすれば分かりずらく、分かり易くと心掛けると忠ならず、と悩むのが普通である。こんなに苦労するなら自分で書いてしまおう、との誘惑にかられる。しかし、青木先生らの訳は大変読み易く理解し易く、すいすいと頁が進んでしまう。本著の出版に感謝しなければと思う。本学会の大部分を占める疫学者は、できるだけ臨床の方々へ勧める義務があるのではないか、そんな本である。そして、自分で買って赤ペンで頁を真っ赤にして読む本である。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

## 第22回日本がん疫学研究会・第6回 日本がん予防研究会開催のご案内

国立公衆衛生院疫学部

兼輪眞澄

第22回日本がん疫学研究会を下記の要項で開催します。テーマは「古くて新しい課題」です。「がん予防のための日本がん疫学研究会提言、1998」の第3項にもとづいて「喫煙対策」についての発表もふくめました。

また、第6回日本がん予防研究会も下記の要項で開催します。

多数の皆様のご参加を併せてお待ちしております。

### 第22回日本がん疫学研究会

日時：平成11年7月14日(水)

会場：国立公衆衛生院3階講堂

108-8638 東京都港区白金台 4-6-1

電話 03-3441-7111

09:30-09:40 開会の挨拶

09:40-11:40 シンポジウム I

「がんの地理疫学」

11:40-12:10 総会

12:10-13:00 昼食

13:10-13:50 特別発表

「喫煙対策の現状と展望」

岩尾総一郎(厚生省保健医療局地域保健・健康増進栄養課)

13:50-14:40 特別講演

「疫学調査における信頼性と妥当性」

